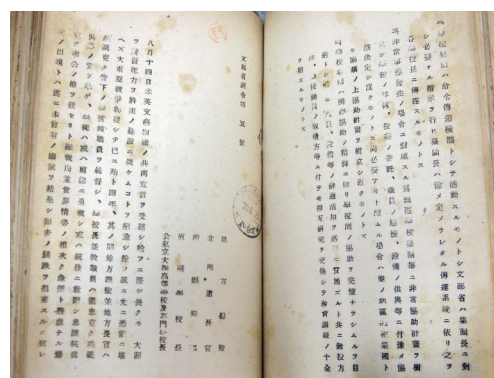
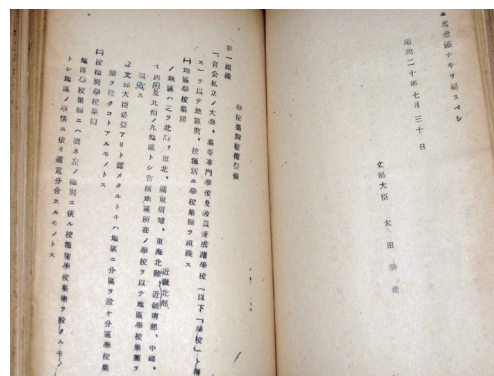


と 門 水 之 紀 きの



資料紹介 和歌山経済・工業専門学校庶務課「昭和十八年六月以降 例規」

本研究が保管・管理する「和歌山高等商業学校資料」は、学校の運営・経営のみならず近代日本の歩みを知る上で重要な資料となる。

ここに掲載された『例規』は、1943年以降に文部省などから送付されてきた文書が綴られたものである。表紙に「永久保存」と記されているように、学校の運営・経営にとって重要な決定事項が記された文書が含まれている。

1938年の国会総動員法をはじめとして日本の戦時統制は時の経過とともに深化した。とりわけ、学生・生徒の「徴兵猶予」が1943年に撤廃されて、「学徒出陣」が決まった。高等商業学校は、1944年に経済専門学校・工業専門学校・工業経営専門学校に転換し、戦時経済に有用な理工系の人材を養成することが求められた。1922年に設立された和歌山高等商業学校は、1944年に和歌山工業専門学校に転換（高等商業学校の在学生在が卒業するまでは和歌山経済専門学校が併設）した。

写真の「学校集団整備要綱」には作成年月日が記載されていない。『例規』が受信した文章の順に綴られていることを考えれば、この文書は1945年7月30日と8月25日の間に受信したことになる。1945年8月25日の文書は、文部省訓令第5号でポツダム宣言の受託を学校に通達したものになるため、「学校集団整備要綱」は文部省からの戦時下における最後の通達文書であったと思われる。

この要綱によれば、官立私立の大学、高等専門学校、教員養成諸学校は、地区別と校種別に学校集団を組織するとされている。地区とは北海道・東北・関東信越・東海北陸・近畿北部・近畿南部・中国・四国・九州であり、校種とは大学集団・高等学校集団・理科系専門学校集団・文科系専門学校集団・女子専門学校集団・教員養成諸学校集団であった。

この決定が実施されれば高等教育の大きな組織変更がなされたといえるが、敗戦とともにこの要綱は反故になった。ただし、この文書の作成過程などに関しては研究史においても明らかにされていない。今後の探求が待たれる。

（長廣利崇／近現代日本経済史・経営史）



巡礼とは何か

大橋直義／日本中世文学・文献学(和歌山大学 教育学部)

巡礼とは 巡礼とは人類の普遍的営みの一つである
とはいえずだろうか。十二使徒の一人、聖ヤコブの
遺骸を祀ったサンティアゴ・デ・コンポステーラへの巡
礼や五体投地を繰り返しながら営まれるチベット・ラサ
への巡礼、そしてハッジとよばれるメッカへの巡礼など
が著名だが、たとえばドイツのシュパイアーやトリアー
大聖堂の周辺にはミニ巡礼地が形成され、ガリシアへ
向かう「大きな巡礼」と重なりあう。また、アルプス北麓
の丘陵地ヴィースの巡礼教会は18世紀に起こったと
される奇瑞を端緒とした巡礼行の隆盛を背景としてい
るという。

にっとうくほうげんがくしょう

日本では、入唐求法還学生に選ばれた最澄が延暦
二十三年[804]に中国仏教の聖地である天台山を
「巡礼」したことを皮切りに(延暦寺文書)、開成五年
[840]の円仁による五台山巡礼(『入唐求法巡礼行
記』)、仁寿三年[853]に入唐した円珍による天台山
巡礼(『行歴抄』)など、入唐僧による聖跡巡礼が行なわ
れる。その後、日本国内でも、讓位・出家した宇多法皇
が高野山・比叡山・熊野三山などの霊山に詣でている。
藤原道長による吉野金峯山参詣(寛弘四年[1007])、
南都諸寺を「巡見」した後の高野山金剛峯寺参詣(治
安三年[1023])が著名だが、「寛仁二年[1018]定心
阿闍梨巡礼記」なる南都巡礼記も伝わっていたことが
知られる(保延六年[1140]大江親通撰『七大寺巡礼
私記』)。西国三十三所順礼は12世紀半ば頃までには
成立していたことは間違いなく(『千載集』1211)、中
世には坂東・秩父の観音霊場も整備され、長享二年
[1488]以後、程なくしてこれらを「百観音霊場」と称し
始めた。また、15世紀前半までには洛陽三十三所霊場
も成立し、四国遍路は文明三年[1471]までに「八十
八ヶ所」が形成されていたと思う。

巡礼と参詣 巡礼とは、宗教的な聖地・霊場に赴く身
体的営みとまずは概括できようか。とはいえ、「外国を
旅する」「さまよう」と邦訳されるラテン語
"peregrinor"を語源とする"pilgrimage"と、漢語由
来の「巡礼」(ジュンライは呉音)、さらに中世以後の日
本における「巡礼」とが同一の営為であるとは無論言
えないのである。これらの相違を考える上で「参詣」が
参考になる。この語は『晋書』王嘉伝に見え、当初は貴
人への訪問を意味するものであったが、平安中期以後、



ヴィース巡礼教会[2015年 稿者撮影]

日常空間から社寺や霊山・霊場へ赴くことを殊に含意
し始めるようになる。事実、9世紀の円仁の段階では、
五台山の寺院・聖跡のあちこちを巡ることも、赤山法
華院から五台山という聖地へ向かうこともいずれもが
「巡礼」で、後の「参詣」という概念は「巡礼」の一部に
含まれていたと見てよい。

平安後期頃より、「巡礼」という語は別の意味を帯び
ようになる。あらかじめ固定された順序・次第に基づ
いて聖なる空間の内部を経巡ることである。たとえば
永和四年[1378]写『観心寺参詣諸堂巡礼記』におい
ては、河内国観心寺に赴くことを「参詣」、そして寺内
の諸堂を順に、つまり次第に則って巡ることを「巡礼」
としている。また熊野三山の「参詣記」である『熊野詣
日記』(応永三十四年[1427]実意撰)においては、熊
野に赴いた後、本宮証誠殿の「御まへ次第に御巡礼あり
」等と記してもいる。卑近な例で言えば、TDLに行く
ことが「参詣」、各アトラクションを巡ることが「巡礼」、
理想的な巡り方を記したものが「巡礼記」である。

「物語」と繋がること そのような見方からすれば、サ
ンティアゴ・デ・コンポステーラ大聖堂やカアバ神殿
への旅はむしろ「参詣」と呼ぶべきものであろう。しか
し、その旅の道のりを初めて歩いたのは誰か、なぜそ
の道が今にあるのかと考えたとき、中世日本における
「巡礼」との相関を指摘せざるをえない。西国三十三所
霊場の始まりは花山院であると語られるが、さらに
それ以前、花山院が
その存在を知りえた
のは、閻魔大王によ
って認められた宝印記
文と熊野権現が先達
僧「仏眼上人」として
顕現したことに拠る
のである。つまり、西
国霊場の巡礼者が歩
む道のりは、かつて花
山院が熊野権現の化
身と共に歩んだと物



西国三十三所順礼元祖十三先達御影像
(架蔵。(寛文七年[1667])刊(後印))

語られる道のりなのだ。同じく、聖ヤコブやムハンマドがかつて歩んだ道と同じ道を踏みしめて行く巡礼者は、その営みによって、言わば「始まりの／聖なる物語」がもたらされた道のりを追体験し、その「物語」と繋がろうとする。「巡礼」とは、

そのような「物語」の恩寵に浴そうとする身体的営為なのである。その「物語」とは、何も宗教的なものばかりとは限らない。映画やコミックといった、新しい「物語」であっても、やはり「巡礼」は「巡礼」なのだ。

「発見」する楽しみ

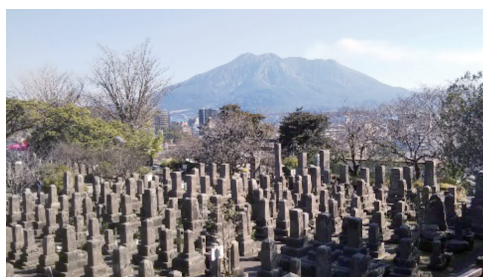
山神達也／人文地理学(和歌山大学 教育学部 准教授)

私は鹿児島市上町地区かんまちで生まれ育った。鯉節屋を営んでいた父は鯉節の名産地である枕崎の出身で、祖母は鑑真の上陸地として有名な坊津出身である。

実家近くの小高い丘には、西南戦争で戦死した西郷隆盛をはじめとする薩軍将士が埋葬された南洲墓地があり、その傍らに浄光明寺が建つ。13世紀に一遍上人が鹿児島を訪れて以降、一遍派の時宗寺院となった。江戸時代には隆盛を極めたが、薩英戦争時に城郭と誤認されて砲撃対象となり、ほとんどの建物を焼失した。その後、再建まなないまま明治を迎え、廃仏毀釈で廃寺となった。その境内跡に薩軍将士を改葬したのが南洲墓地である。浄光明寺は明治半ばに再興された。

浄光明寺の麓に上町地区が広がる。上町地区は戦国期に整備された城下町を基盤とし、中心部に島津氏の本城である内城うちじょうがあった。平城で堀もない館造りであった。17世紀初頭に鶴丸城(鹿児島城)が築かれ、島津氏は居城を移すと、内城跡には大竜寺が建立された。初代住職は南浦文之なんぼぶんしである。大竜寺も廃仏毀釈で廃寺となり、跡地は私の母校である大龍小学校となった。正門脇には南浦文之の記念碑があり、同校の校歌でも「学僧文之のあとしたし」と歌われる。

島津氏が鶴丸城に移った後に鹿児島市中心部の城下町が整備され、鶴丸城より北方が上方限かみほうぎり、南方が下方限しもほうぎりとされ、上方限が後に上町と呼ばれることになる。戦国期の城下町は上方限に含まれ、大竜寺周辺は、今和泉島津家や重富島津家などの島津分家をはじめとする上級武士の屋敷が立ち並んでいた。私の実家は今和泉島津家屋敷跡の近くにあるが、上級武士の屋敷地が切り売りされた狭小な家である。



南洲墓地からみる桜島



今和泉島津家の屋敷跡

さて、私は人文地理学を専門とし、現代日本の諸地域の人口分析を主たる研究テーマとするが、地域の歴史的な変遷にも興味があり、なじみ深い地域の歴史を勉強することが多い。本学に赴任して以降、和歌山の歴史を調べる機会が増えるなか、驚くべき「発見」があった。

まず、母校の校歌に歌われる南浦文之が執筆した「鉄砲記」は鉄砲伝来の数少ない記録であり、種子島に伝わった鉄砲が根来寺に贈られた経緯を記す。鉄砲を駆使した根来衆や雑賀衆が鹿児島とつながりを有していたのであろう。また、祖母の

出身地の坊津は、古代から日本と中国とを結ぶ航路の寄港地で、地名の由来とされる寺院の一乗院は、中世には根来寺の別院であった。さらに、浄光明寺は一遍派の時宗寺院となったが、一遍上人は熊野で熊野権現から神託を得たとされる。そして、枕崎に鯉節の製法を伝えたのは紀州印南の出身者といわれている。身近なところに鹿児島と和歌山の歴史的なつながりを「発見」したことは驚きであった。

また、和歌山以外での身近な歴史の「発見」で最大なのは、実家近くの今和泉島津家屋敷跡が天璋院篤姫の生家であったことである。幼いころから歴史に興味を持っていたが、近所にNHK大河ドラマの主人公となる人の生家があることは知らなかった。地元の人にとっても篤姫は「発見」されるものであった。大河ドラマ放映以前の鹿児島のガイドブックで篤姫はほとんど記述されていないのである。

慣れ親しんだことに意外な歴史が隠れていることがある。和歌山にも「発見」されていない歴史が眠っているであろう。そうしたものを「発見」する楽しみを多くの人と共有したいと考えている。

紀伊半島のロギオスたち— λόγιος — 紀州研に所属する研究者(ロギオス λόγιος)たちの 研究を紹介します

どうしたら和歌への関心を高められるだろうか。教育学部に赴任して十年、自分の研究に夢中だった私がそんなことに悩んだのは、当時ゼミ生の多くが小学校教員になったからだ。卒業後ゼミ生たちが、小学生と一緒に楽しめる教材を作れないか。そこで注目したのは「五色百人一首」だった。これは百人一首を20枚1組にして五色に分けたうえ、個人

対戦型にしたものだ。学生達とやってみると、1回15分とテンポがよく、1対1なのでやたら盛り上がる。

しかし、毎回の授業となると困った。5組すべてやると1コマがつぶれる。1組に限定して和歌の学習につなげようとしても、ぜひ欲しい名歌があちこちに散らばっている。あれこれ悩んで、いっそのこと百人一首を自分達で手作りすることにした。これが「セレクト20」の始まりだ。厚紙に千代紙でカバーし、上句下句を印刷したシートを切って貼り付ける。実に面倒な作業だが、ここからいろいろな発見と発展があった。

①マイ・カルタ→作る喜び・いつでもどこでも。



手作りカルタ「セレクト20」

②自由な選歌→百人一首から近代短歌・漢詩へ。

③朗詠→体感する和歌のリズム。

④国語科教育の授業→小中高での授業実践・学長杯かるた大会。

それぞれに発見があったのだが、当初予想もしていなかったのは、③の朗詠だ。ある女子学生が始めたのだが、小学校で実践すると「いいです

ねえ、学生さんたちの朗詠」と先生たちが言う。最初「へんな読み方」と笑っていた子供たちが、しだいにまねをする。それを見ているうちに、どうもこれが小学生に一番大切なのだと気づいた。

和歌のリズムと古典の言葉を「耳から入れ、口から出す」。これは幼児が母親から言葉を学ぶ過程そのものだ。つまり、カルタ遊びを通じて、古典を母語として身体化していたのだ。どの民族にとっても韻文が大切にされたのは、このためだったのではないか。

(菊川恵三／上代文学)

私の研究分野は芸能史研究および、民俗芸能研究です。芸能史研究では中世の田楽躍りを中心に専門の芸能座に所属する芸能者とその芸能を「演じる場」また「パトロン」となる寺社との交渉史を江戸時代を中心に行なってきました。田楽躍りは中世には「四座(大和猿楽：観世座、宝生座、金春座、金剛座)之太夫之類」(『田楽法師由来之事』1755年[宝暦5])とされ、平安時代末期から南北朝時代にかけて大流行した芸能でした。しかし、室町幕府による猿楽の庇護などが原因で室町時代後期以降衰退していきます。私はこの田楽躍りの「衰退」に注目し、その影響が芸能の世襲制や技



【左上】春日田楽(春日若宮おん祭)、【右上】那智田楽(那智の扇祭り)、【左下】和歌祭唐船・御船歌、【右下】和歌祭唐人

芸にまで及んでいたことを明らかにしていきました。この事例をきっかけに田楽躍り以外の芸能の変容にも注目しています。

また、和歌山では紀州経済史文化史研究所の和歌祭御船歌復興(2010年)と唐人復興(2017年)に参画し、地域での祭礼芸能の復興だけでなく継承の問題、さらには、地元・

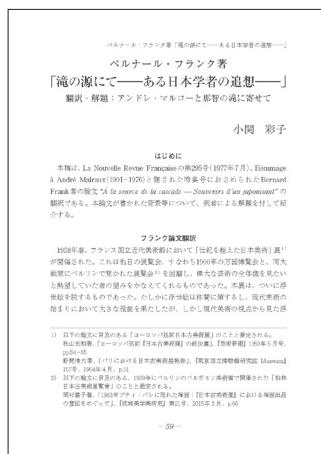
泉大津市のだんじり祭りの役員をしていることから、地域間での祭礼文化の流入や少子・高齢化や生業の変化による消滅などの現代的問題も積極的に活動・研究をしております。

(吉村旭輝／芸能史・民俗芸能研究)

私の専門はフランス哲学ですが、今回は昨年当研究所の紀要に発表した翻訳論文についてご紹介します。

著者ベルナール・フランクは密哲学を専門とする、フランスにおける日本学の泰斗であり、本論文はフランスの元文化大臣・作家のアンドレ・マルローが1974年に那智の滝を訪れ、帰国後その印象を『神々の変貌3 非時間の世界』に著すに至った経緯を記録したものです。フランスにおける日本思想・美術の受容がここ紀州に大きく影響を受けていることをぜひご紹介したく、門外漢ながら翻訳を試みました。

フランス人にとっての日本は、まずは浮世絵の発見とジャポニスムの流行に始まり、その後時代を遡って、禅思想と武士道が人々の心をとらえました。しかし著者フランクは、より古い密教や浄土思想、そして、制度化された仏教や神道の枠組



【左】紀州経済史文化史研究所紀要、第39号、2018年12月
【右】ベルナール・フランク氏の書斎にて、氏の遺影と遺骨の前で淳子夫人

みを超えた習合的な民衆の心性に着目しています。フランクは和歌山出身の夫人と共に、高野山や熊野古道を度々調査していたことから、マルローの来日に際して、彼を熊野に案内することを提案しました。そして、マルローが那智の滝に深い印象を与えられたことが、その後のフランスにおける日本理

解の幅を大きく広げることになります。「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界遺産に登録され、現在多くの外国人で賑わっていることは、隔世の感があります。

戦前からのヨーロッパにおける日本美術展の歴史を振り返る本論文は、外国から日本に向けられた眼差しと、日本側が外国に見せようとしてきたものについて改めて考える契機ともなるものです。

(小関彩子／哲学)



イベント参加記

たのしい考古学 一学んで、さわって、 調べてみよう

10月19日(土)に、紀州経済史文化史研究所・わかやま文化財の「匠」講座に参加させていただきました。

「たのしい考古学-学んで、さわって、調べてみよう-」と題した今回の講座は、考古・民俗資料を中心とした和歌山県の博物館施設である「紀伊風土記の丘」の学芸員の方による、考古学に関する解説

や土器の説明が行われました。普段、紀州経済史文化史研究所のボランティアメンバーとして文化財や歴史的資料に携わっている中でも、考古学の範囲の資料を扱うことは少なく、今回の匠講座では、その点においても大変貴重な経験をさせていただきました。

特に、講座の後半では、「埴輪のパズル」を体験させていただきました。円筒埴輪、象形埴輪の二種類をパーツひとつひとつの形だけを頼りに組み合わせ、埴輪のかたちをつかっていくというものでしたが、非常に難しく、考古学を研究しておられる方々の難しさと努力を身をもって経験することができました。今回の講座の中で、考古学の世界にふれ、その奥深さやおもしろさについて学ぶことができたと感じています。

(芝崎もか／教育学部 四回生・紀州研ボランティアメンバー)



七宝瀧寺と志一上人
—葛城修験二十八宿の世界—

2019年10月31日(木)より12月13日(金)までの間、紀州経済史文化史研究所特別展「七宝瀧寺と志一上人—葛城修験二十八宿の世界—」を開催した。犬鳴山七宝瀧寺の多大なるご協力を頂戴しつつ、七宝瀧寺と歴史的に深い関わりを有した根来寺をはじめ、葛城二十八宿の道のりの南北に所在する寺社—火走神社・粉河寺・神於寺および歴史館いずみさの・和歌山県立博物館等に蔵される文化財を借用し、この地域の歴史・文化の一端を弊所展示室に復元しようとしたものである。関係各位に記して深謝申し上げたい。

紙幅が限られていることもあり、ここでは七宝瀧寺所蔵文化財のうち、〔平安時代〕写『法華経 化城喻品第七 残欠』一紙に着目してみたい。経塚の営造が盛んになる平安中後期頃に犬鳴山燈明ヶ岳に埋納された経典で、1950年(昭和25年)に出土したものの。今回、これが収められていた経筒も併せて展示することができたが、注意しておきたいのは、『妙法蓮華経』二十八品のうち、いずれの章節が犬鳴山にあてられていたのかという所伝の変遷である。嘉永三年〔1850〕に犬鳴山七宝瀧寺によって刊行された『葛城雑記』においては、周知のように「五百弟子授記品第八」があてられている。この説は、経塚のそばに建てられる板碑に「一乗妙典 五百弟子授記品 長祿三己卯〔1459〕十月十五日」と見えることに拠る。

ところが、文亀二年〔1502〕九条政基写『七宝瀧寺縁起』(宮内庁書陵部蔵)には「犬鳴之峯」が「寿量品第一十六ノ宝土」にあたるものと明示されているのだ(「一」は「二」を見せ消ち抹消の上、傍記)。この一文は「天平宝字丁酉(元年〔757〕)記録」と伝えられる『縁起』前半の冒頭部分に見られるものだが、内容からして後世のもので、『縁起』全体の最下限記事、すなわち、山名氏清が大猷勇健に帰依し伽藍を修造したとされる嘉慶年間〔1387-89〕から、さほど遡らない頃に著述されたものと見ておきたい。なお、禅徳寺蔵『犬鳴山七宝瀧寺縁起』に拠れば勇健本堂修造は永徳四年〔1384〕のこと。また「永和二年〔丙辰〕〔1376〕八月廿八日 願證敬白」の年紀を有する板碑二基が寺内最古の石造物である。

『葛城峯中記』の類では、若王子千勝寺住僧の鎮永〔1394-1427〕の本奥書を有する系統が七宝瀧寺に言及する初例。『諸山縁起』の同じ箇所「勸進経、為^{メニヌ}犬口伝アリ」とあって、鎌倉初期の段階から犬鳴山に義犬伝承が存在したことをうかがわせるのだが、いずれにせよ、この地に法華経が埋納されたとはしない。

これらのことから分かるのは、実際には平安期頃に「化城喻品」が犬鳴山中に埋納されていたにも関わらず、鎌倉初期までの段階でそのことが忘れられてしまっていたこと、南北朝期の犬鳴山内においては「寿量品」とされていたが、15世紀半ばまでには「五百弟子授記品」と理解されるに至ったこと、しかしながら本山派内において「葛城二十八宿」として統合的に整理されるまでには及んでいなかったことである。本特別展が目指したのは、このうち第二項の南北朝期における山内の動向である。ここに、本展の副題に掲げた「志一上人」伝承圏の位置付けが関わるのだが、これについては改めて論じたい。

特別展の会期中、時期にそぐわぬほど暖かな11月23日、特別展関連イベントとして、「日根荘の史跡をめぐる」と題したエクスカーションが開催された。日根荘は天福二年〔1234〕に九条道家を当主とする九条家によって立券され、十六世紀初頭に足かけ四年にわたって当地に滞在した九条政基が著した『旅引付』と、正和五年〔1316〕に描かれた二枚の絵図によって往時の状況を明らかにしうることでも有名な中世荘園である。今年5月には「日本遺産」に選定されたこともあって、いま再び脚光を浴びている地域である。今回、その「日本遺産」登録に尽力された歴史館いずみさのの学芸員でいらっしゃる細田慈人氏に講師を依頼し、現地を歩くことでしか見えてこない面白さをご案内いただいた。

特別展のテーマでもある七宝瀧寺へ向かう犬鳴山登山から始まり、蓮華寺・香積寺跡・火走神社・御所谷毘沙門堂・円満寺を経て、政基が住した長福寺跡までを歩いた。午前中の犬鳴山山中は冷気が漂い、そこが信仰の場であり続けていることにいやがうえにも気づかされたが、一方、重要文化的景観に指定される大木地区の「農村景観」を緩やかに下ってゆくと、途端に体があたたまってきた。政基も見たはずの光景そのもののなかで、今も暮らしが続いていることを知りえたからかもしれない。

踏査と解説に熱が入りすぎてしまったせいか、当初予定していた日根神社・慈眼院などには赴くことができなかったが、また春にでも歩いてみたいものである。

(大橋直義／中世日本文学・文献学)

七宝瀧寺と日根荘

—九条政基『旅引付』をめぐって—

2019年11月24日(日)、エブノ泉の森ホール大会議室において、公開シンポジウム「七宝瀧寺と日根荘—九条政基『旅引付』をめぐって—」が開催された。

公開シンポジウムは4名の研究者による個別発表ののち、シンポジウムが行なわれた。まず、当研究所副所長大橋直義氏は「七宝瀧寺縁起攷—「外法成就の志—上人」—」と題した個別報告を行ない、文亀二年(1502)九条政基写『七宝瀧寺縁起』内の仮名縁起に記された「阿波ノ小聖」の中興(時代不明)と「橋本廷尉、法名常秀」による帰依・寄進(正平年間[1347~70])の箇所が分けて記されていることに対し、のちに『犬鳴山七宝瀧寺記』(寛文三年[1663]、禅徳寺蔵)に中興が橋本正高および粉河寺の志—上人に集約化された違いについて、また臨済宗法燈派の至一を『犬鳴山七宝瀧寺記』の「志—」と同一と推定し、七宝瀧寺の中興開山を法燈派(禅)の影響も含めてみていく必要があるのではないかという問題提起がなされた。



また廣田浩治氏からは「中世の村人と修験」と題し、『旅引付』を中心に七宝瀧寺の別当でもあった九条政基と同寺の関係、そして日根荘内入山田村と同寺との関係を明らかにした。さらに歴史館いずみさのの細田慈人氏からは「九条政基と陰陽道—『政基公旅引付』にみる—」と題し、九条政基がつねに暦を中心に政務や行動を行っていたことなどが紹介され、日根荘での暦の取り寄せに際しての陰陽師と経師との関係、さらには政治的局面で重視される神仏との使い分けなど、「中世」での貴族が在地経営

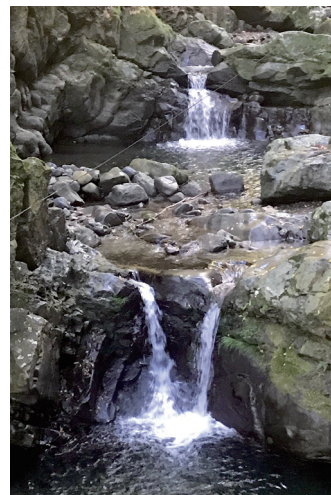
における思想的背景を垣間見ることのできる内容となった。最後に個別発表を行なったのが中央大学の熱田順氏である。同氏は「中世後期の領主権力と地域社会—和泉国日根荘を中心に—」と題し、『旅引付』から守護細川氏と対立する根来寺に翻弄される日根荘民の姿を紹介した。その後行なわれたシンポジウムでは大橋氏の七宝瀧寺中興をめぐって、至一への足利基氏の帰依や「禅」の考察の必要性などが議論された。

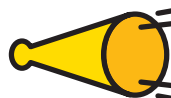
私自身泉南地域の秋祭りの調査を行ない、その分布圏と歴史をちょうど執筆中でもあり、内容的にもその分布の境目にあたる日根荘を流れる樫井川流域の村々の動向についての発表であった熱田氏の日根荘入山田村の樋の洪水による被害での長瀧、上郷の協力、またそれとは逆に守護・細川氏による日根荘への侵攻に裏切る熊取、上郷の村民の姿を「戦国時代の社会像」としている熱田氏の発表に注目したい。

『旅引付』からは熱田氏が導き出した結論が妥当であろうと考えられる。しかし、現在の地域と照らし合せてみるとさらなる見方も可能ではないかと考えている。七宝瀧寺から流れ出す樫井川は地域を潤し、海へと流れ出る。その水を利用しているのが上郷、長瀧以下、下流の村々である。樋の修復での協力は下流域の住民にとっても重要であり、死活問題となる。しかし根来寺への守護の侵攻は住民にとっては隣国への侵攻であり、根来寺配下の七宝瀧寺配下の日根荘民以外にとっては、素直に従うべき問題であったと考えられる。結果的に守護の相手が根来寺ではなく七宝瀧寺となってしまう、熊取と上郷の住民は日根荘の抗議に対して弁解に走るようになるが、この一連の流れは樫井川の水利による地域的な結びつきによるまっとうな結果ではないかと考えることができる。

『旅引付』は荘園経営史をみる上でもっとも重要な史料のひとつだといえる。七宝瀧寺や日根荘に関する史料だけでなく、さらにそこに関連する周辺地域の地理、生業等も含めた「資料」とあわせてみていくことの重要性をあらためて感じさせられたシンポジウムでもあった。

(吉村旭輝／芸能史・民俗芸能研究)





紀州研 秋の公開講座 報告

今年度の紀州研秋の公開講座は、『わかやま文化財の「匠」講座』として2019年10月18日(金)と10月19日(土)に実施された。

10月18日には所蔵品に風を通して虫干しをし、台帳と照合する曝涼会を公開した。これは初の試みとなる。紀州研には古文書や土器などの所蔵品が保管されている。これらをひとつずつ台帳と照らし合わせて保管場所と所蔵品の確認を行った。この作業には紀州研の学生ボランティアの力が発揮された。

10月19日は、和歌山県立紀伊風土記の丘の学芸員の金澤舞氏を招いて「たのしい考古学—学んで、さわって、調べてみよう—」が公開講座として実施された。金澤氏より発掘調査のあり方や考古学研究の最前線の知見が提示された。当日の参加者は学生が多かったが、日頃経験し得ない太古の人々の営みに思いふけることができたようだ。

考古学講座では、バラバラに出土された破片を再現する体験もなされた。とりわけ、大日山35号墳から出土された「翼を広げた鳥形埴輪」(写真はそのレプリカ)は日本国内の初例となる希少なものである。参加者は苦慮しながらもパズルのようにこの埴輪の再現を行った。だが、この作業に参加者は苦労していた。それは、市販のパズルとは異なり、完成図のない破片から全体像を再現する必要があるからだ。この体験を通して、考古学研究の難しさとともに楽しさを学ぶことができたと思われる。

(長廣利崇／近現代日本経済史・経営史)



information

2019年度
企画展

紀州経済史文化史研究所 紀伊半島から考える日本史

会 期／2020年1月10日[金]～2月27日[木]
会 場／紀州経済史文化史研究所展示室(西5号館3階)
入 場／無料
開館時間／10:30～16:00
休 館 日／土・日・祝日・図書館休館日(2月25日[火])

紀伊半島世界史研究会は昨年『世界史とつながる日本史 紀伊半島の視座』(ミネルヴァ書院刊)を刊行して、2022年施行の高校新科目「歴史総合」の副読本とした。この試みは、地域史と世界史の融合の先端事例として日本歴史学協会・日本学術会議などから高く評価された(その詳細は、『日本歴史学協会年報』2019年度、日本学術会議機関紙『学術の動向—科学と社会をつなぐ』2019年11月号に論じたので参照していただきたい)。

今回の展示は、このような研究成果を踏まえて、現在教育学部の歴史教室(日本史)が県下ですすめている「7分間地域史運動」(授業の冒頭を地域の素材から導入する)のパネルを展示したい。紀州研の展示であるから、できるだけ地域の歴史モニュメント・遺跡史的なモノ史料を選んで、歴史のダイナミズムを伝達する事例を通史的に並べたい。

Ⅰコーナーでは学生が集めた原始～現代史の地域教材を中心に、Ⅱコーナーでは移行期・変革期を中心として世界につながる事例を紀伊半島世界史研究会の研究成果から、Ⅲコーナーは中世の禅律僧によって捏造された荘園遺跡群、Ⅳコーナーは20世紀の思想弾圧によって捏造された戦争遺跡群を展示・解説する。(以上はすべて予定である。)

日本史・世界史の教職員にぜひ見学いただきたい。

*本研究は「中世の紀伊半島における歴史遺跡・名所の創作および保存・活用事業データベースの作成」(観光学・JSPS科研費・海津一朗代表)の研究成果である。

